

● 国語・特別支援教育・幼小連携 ●

## 全ての子供に義務教育初期段階の学びの土台を築く ～タブレットパソコンの活用や幼稚園との連携強化等による平仮名読みでつまずく低学年児童への早期支援～

静岡県 袋井市立袋井西小学校（校長 柴田禎弘）

- ① 多様な児童が入学してくる本校にとって、低学年の生活や学習の安定は、そのまま学校の安定や中学校接続まで影響を与える大きな課題である。
- ② 袋井市は、これまで教育施策として幼小中一貫教育と ICT 環境整備を積極的に進めてきた。
- ③ 2019 年末に iPad が 6 人に 1 台整備されることを契機に、MIM デジタルを導入し、1 年生で学習につまずく子供を早期に発見、支援することを心掛けた。
- ④ 近隣幼稚園との連携を強化し、相互の理解と信頼を深めるとともに、得た情報を 1 年部の学年経営に生かした。

### 〔はじめに〕

袋井市は、静岡県西部に位置し、東海道五十三次の中に位置する市でも知られている。かつての袋井宿の中に位置する本校は、「東海道どまん中西小学校」との異名もある。明治 6 年に創立し、令和 5 年には 150 周年を迎える地域に支えられた歴史ある学校である。今年度の児童数は 506 名、通常学級は 18、特別支援学級が 6、外国籍児童が 32 名在籍する。

また、袋井市は、2019 ラグビーワールドカップにおいて、日本が優勝候補アイルランドを破り、世界中に「エコパの衝撃」として報道されたエコパスタジアムがある市でも知られている。2019 年 9 月には、本校児童もエコパスタジアムでワールドカップを観戦し、世界中から人々が集い、

スポーツを通して心をつなげることに素晴らしさを肌で体験している。

そこから半年足らずで世界は一変してしまった。日本中の学校がそうであったように、本校も新型コロナウイルス感染症予防の対応に追われた 1 年となった。本研究はそのような状況の中で行われた。



◆大正期に作られた正門

## I 研究の概要

### 1. 児童の実態

#### (1) 低学年児童の実態

ここ数年、本校には80名前後の児童が入学している。そのうちの約半数は、近隣の袋井西幼稚園、田原幼稚園、明和第二保育園からの入学である。しかし、賃貸住宅の多い地区であることも影響してか、残り半数の児童は、15園以上の幼稚園・保育園からの入学である。各園の実態・環境、教育方針も同じではない。更に社会の多様化に伴い、様々な生育歴、家庭環境の児童が入学している。外国人児童や発達に凸凹のある児童も多い。

多様な家庭状況は、家庭の教育力にも影響を与えている。本校に限ることではないと思われるが、結果として基本的な生活習慣、学習態度がなかなか定着しない児童が一定数見られることにつながる。中には学習不適應を起こし、それが3、4年生になるまで尾を引く場合もあった。

低学年における基本的な生活習慣・学習習慣は、いわば学びの土台である。教員はそこを安定させたいという思いが強く、中学年になっても細かな指示を出すことが多くなる傾向が見られた。結果として、主体的に考え判断する力が児童に十分育ていないのではないかという課題があった。

#### (2) 中学校との連携・接続の中で

本校卒業生は基本的に袋井中学校に進学する。過去に袋井中学校において問題行動の多発や不登校生の増加、学力不振等、様々な教育課題が顕著になったときに、その解決を目指し、袋井中学校に進学する他の2小学校とともに自己有用感を育むことを軸とした小中連携教育が進められた。

各小学校では、特に高学年において中学校での生活を意識し、学習規律や生活習慣の指導に力を注いだ。小中が連携して努力した結果、H27年度には年間240件近くあった中学校での問題行動が、H30年度には約70件に減少した。

本校においても児童は学年が進むにつれ落ち着いた学校生活を送れる状況になっていった。しかし、低学年児童の実態と相まって、教員主導の学習活動が多くなった結果、児童に自信や主体性のなさが見られ、自分たちの良さを積極的に評価しない傾向が強くなるようになった。

この課題に対し、一人一人の児童の良さを認め励まし続ける指導の必要性とともに低学年において全ての子供に学びの土台を築くことが重要だと認識した。そのためには、幼小の接続部分の改善が重要であるとの思いに至った。

### 2. 背景となった袋井市の教育施策

#### (1) 袋井市幼小中一貫教育のスタート

袋井市は、各中学校区で進められていた小中連携を一貫教育に発展させる整備を進めてきた。更に市内公立幼稚園が充実している事を踏まえ、幼小中一貫教育へと発展させ、令和元年度に袋井市幼小中一貫教育を市内全中学校区でスタートさせた。

本中学校区は、袋井あやぐも学園という愛称に決まり、1中学校、3小学校、5公立幼稚園からなる施設分離型一貫教育をスタートさせた。

袋井あやぐも学園の公立5幼稚園のうち、本校と直接つながるのは袋井西幼稚園と田原幼稚園の2園である。

#### (2) 多層指導モデルMIMの導入

袋井市は、数年前から国立特別支援教育

総合研究所主任研究員の海津亜希子氏が開発した多層指導モデル MIM を導入し、積極的に研修を行ってきた。MIM は、平仮名の特殊音節の読みに焦点を当て、通常学級において学習面に困難さのある児童のアセスメントと指導を行い、全ての児童が文字や語句を正しく読んだり書いたり、なめらかに読んだりできるようにすることを目指した指導モデルである。

主に1年生の担任が研修を受け、実施をしてきたが、印刷や採点、集計等、指導していく時間や手間が障壁となり、理念は理解できても学校現場での継続的な指導にはなっていなかったのが現状である。

### (3) ICT 整備

袋井市は当時の国の計画より1年早い2022年までに一人一台端末整備を完成させる計画を立て、2019年度末には6人に1台の割合で端末の整備を行った。本校も80台のiPadが2019年末に配備され、授業での活用を進めていた。

iPadが整備されると同時にアプリケーションとしてMIMデジタルが開発されていることを知り、学校単独で導入することとした。教員の少ない負担で多層指導モデルの実践が可能になると考えたのである。

## 3. 研究のねらい

これまで述べてきた実態と背景から、MIM デジタルの活用と幼稚園との連携強化を図ることによって、平仮名読みでつまずく児童への早期支援を図り、同時に基本的な学習習慣や生活習慣の定着を実現することで、全ての児童に学びの土台を築くことを目指した。これは、単に1年生が学校教育に適応するというにとどまらず、誰一人取り残すことなく全ての子供に義務

教育初期段階の学びの土台を築くことを意味する。幼小中一貫教育の立場で考えたとき、義務教育初期段階の学びの土台を築くことは、15才の義務教育の出口に向かって確かな成長を保障する重要な手立ての一つとして捉えている。

## II 研究の実際

### 1. 多層指導モデル MIM デジタルの実践 (1) 全体研修

通常学級には異なる学力層の児童が存在する。MIM では一斉指導で理解できる階層を1st、一斉指導では理解が難しいが、授業での意図的な支援を入れることで理解できる階層を2nd、授業の中での支援だけでは理解に至らず、取り出して個別指導の時間を必要とする階層を3rdと名付けている。多層指導モデル MIM とは、アセスメントによって、児童の学習状況を把握し、困っている児童に的確に支援を入れることを目指している。

多層指導モデル MIM を袋井市が導入して数年になるが、小学校教員にその理念が浸透しているわけではない。中には、単に国語科における平仮名の特殊音節の読みの指導方法だと認識している教員もいる。

そこで、国立特別支援教育総合研究所の海津亜希子氏に来校していただき、校内研修として MIM の理念について語っていただくと考えていたが、新型コロナウイルス感染症のため不可能となった。

そこで、MIM の理解を深めることが本研究のスタートであることから、海津氏にリモートでの講演会ができないかを打診した。全国から同様な依頼があったということで、海津氏は MIM 開発の経緯やその理念、通常学級において学習でつまずいている児

童の実態とその対応例を解説した動画を作成し、DVDにして送ってくださった。それを基に全教員による研修を行った。ちなみに、校内研修も密になることを避け、リモートによるグループごとの研修とした。



◆ MIM 校内研修

更に、低学年及び特別支援学級、外国人初期支援指導においても MIM デジタルを活用していく研修も行った。

## (2) 1 年生 年間指導計画の位置付け

袋井市は新型コロナウイルス感染症予防のため入学式の翌週 4 月 14 日から 5 月 17 日までの約 5 週間が臨時休業となった。

本校では、その間、週 1 日を登校日とし、2 時間の学級指導の中で家庭学習の指示を出した。1 年生については、週 1 日の登校日の中で平仮名五十音の指導と家庭学習の指示を計画的に行ったことで、学校再開後の円滑な学習につながった。

1 年生の国語科指導計画の中で、濁音、半濁音、促音、長音、拗音、拗長音の指導で MIM を明確に位置付け、全ての学級において授業で共通に指導した。また、MIM を活用した特殊音節の学習プリントを作成し、1 学期後半の家庭学習として活用した。取組みを保護者に見届けてもらったことで、保護者にも MIM の理解が進んだ。

## (3) アセスメントとトレーニングの実際

1 年生は、平仮名と MIM のルールの指導を 1 学期末まで行ったため、MIM デジタルを活用し始めたのは 2 学期からであった。休業明けの教育課程の調整もあり、アセスメントも 1 学期は行わなかった。

使ってみて、1 年生が授業の中で MIM デジタルを活用するには、課題が大きいことが分かった。まず、iPad の起動はできても、1 年生が一人一人ログインしていくには、30 分以上かかったのである。また、当初 LTE 通信だったため、受信状況も安定しないこともあった。6 人に 1 台の iPad 整備は、当時この地域では画期的であったが、この台数では、授業の中で 1 年生が活用し、成果を出すには難しかった。

アセスメントは月に 1 回、定期的に行う計画を立てた。トレーニングについては日常的に iPad を使用することができず、アセスメントをする時間の前後で入れるにとどまった。児童は iPad を使用するだけで意欲を見せたが、月に 1 回程度のトレーニングでは、学習の意味が分からずゲームのように操作している児童も見られた。

後でも記述するが、MIM デジタルは 2021 年 1 月に一人一台端末環境が実現して初めてその力を発揮したというのが実感である。



◆ MIM デジタルを使う児童

#### (4) 一人一台端末での活用

国が GIGA スクール構想を前倒ししたことを受け、袋井市も一人一台端末と無線 LAN 環境を令和 2 年度予算で急遽整備することにした。静岡県内では最も早く 1 月から使える状況を整えていただいたことは大変有り難かった。

1、2 年生は iPad、3 年生以上は Chromebook という端末となり、使用に関してはその都度 ID とパスワードを入力することが求められた。本校では、低学年に関して、入力に非常に時間が掛かるため、児童が使用する端末を固定し、その都度ログイン、ログアウトすることはやめた。その結果、授業で必要な時に取り出し、気軽に活用することができた。特に、MIM デジタルに関しては、授業のほんの僅かな時間でもトレーニングができるようになった。更に、雨の日の昼休みは端末の使用を認めたことで、MIM デジタルのトレーニングに喜々として取り組んだ。

積極的にトレーニングに励んでいた 1 年生 3 人の児童は 12 月末から 1 月末の 1 か月で 50 点満点のアセスメントで 10 点以上の改善が見られた。

アセスメントで顕著な伸びを見せた児童

	第 4 回 12 月	第 5 回 1 月
児童 A	10 点	22 点
児童 B	25 点	37 点
児童 C	30 点	40 点

主体的に端末を使って MIM デジタルのトレーニングを友達同士で競い合いながら進めていたことは、確かな定着につながっていることが分かった。



◆昼休みに MIM デジタルで学ぶ児童

#### (5) 授業の中での個別指導

9 月からアセスメントを実施したが、ほとんど MIM デジタルでのトレーニングができない状況だったことや 1 年生が iPad そのものの操作に慣れていなかったことなどから、アセスメント結果が的確な見取りにつながらなかったという印象があった。

しかし、第 4 回 12 月の結果で 2nd、3rd ステージ相当となった児童は、文章を正しく書いていない実態がはっきりしてきた。また、同じく第 4 回の結果、20 点以下の児童は、国語科の定着度を図る診断評価でも平均以下であった。平仮名読みのつまづきがそのまま国語科の学習のつまづきになっていること、それは一人一台端末環境で積極的にトレーニングを行えば改善できることも分かってきた。

#### (6) ニーズに応じた取り出し指導

個別の支援が必要な階層が 3rd であるが、今年度の 1 年生児童は、授業の中での意図的な個別支援によって、3rd の可能性がある児童も学習不適應の状況には至っていない。

それに対し、2 年生には学習不適應の状

況にいる 3rd の児童Dが存在する。特に国語科で文を書く活動では、拒否反応を起こすことがある。そのような状況の場合は保護者の理解の下、支援員がついてMIM デジタルのトレーニングを行わせた。言葉のまとまりを認識する力が弱いことが分かり、重点的にトレーニングを行わせている。

また、初期支援段階の外国人児童にとっても、MIM デジタルでのトレーニングに対しては意欲的な取組みを見せる。言葉の意味の指導と平仮名読みの指導を組み合わせ、定期的なアセスメントを行うことで、日本語の平仮名読みの力の評価に生かしていくことを目指している。



◆外国人初期支援教室での取り出し指導

## 2. 幼稚園との連携強化

### (1) 袋井あやぐも学園幼小中一貫教育

袋井あやぐも学園は、年3回全校・園の教員が一堂に会する全体での一貫教育研修会を実施してきた。今年度は新型コロナウイルス感染症予防のため、8月の研修会が中止となり、6月の全体研修会も複数の会場に分散してリモートでつなぐ形での会となった。

6月の全体研修会では、本校に袋井西幼稚園、田原幼稚園の教員に来ていただき、本校1年生担任との協議ができた。袋井あやぐも学園小中学校が考えている授業づくりの方向性について、幼児教育の立場で意

見をいただいた。幼稚園教員には小中学校の課題と目指す授業の方向性を理解の上で、幼児教育とどう接点を見いだすか教えていただいた。



◆一貫教育研修会分散会

小学校は入学から1か月半の間は、スタートアップカリキュラムとして、円滑な学校生活への適応に配慮した活動を行っている。今年度は臨時休業からの学校再開が5月18日だったこともあり、再開後に1年生児童が学校生活に適応できるか心を配っていたが、6月に幼稚園教員と情報交換ができたことは、1年生の学年経営の上でとても有用であった。

また、11月の一貫教育全体研修会では、本校が会場となり、全学級の授業を公開し、子供たちの姿を通して、15才の出口に向かって学園の幼稚園、小、中学校が同じ目標に向かって教育活動を展開できているかを話し合った。

### (2) 1年学級担任の幼稚園訪問

袋井市の公立幼稚園では、指導要録とは別に、小学校入学前の一人一人の園児について育ちの状況を見取った「連携シート」を作成して小学校に送っている。2月には保幼小連絡会で一人一人の園児についての情報提供をしていたらしている。

本校は、それに加えて1年全担任が1学

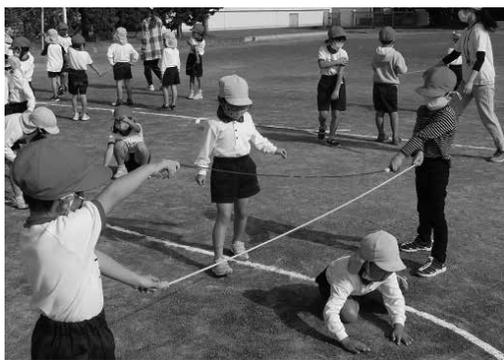
期末に袋井西幼稚園と田原幼稚園それぞれに出向き、その園出身の児童について「連携シート」をもとに情報交換を行った。幼稚園にとっては、園での学びが小学校での成長にどのように結びついていくのか、具体的に知ること、各保育活動の意義を確認し、実践への自信を深めることができた。小学校にとっては、シートには表せない子供の情報を得ることで、今後の指導方法の有力な参考になった。互いの信頼関係をより深めることにもつながった。

### (3) 園児・児童の交流

本校は、これまでも袋井西幼稚園、田原幼稚園、明和第二保育園の3園とは近隣にあるという地の利を生かし、園児児童の交流を行っている。本年度は保幼小それぞれの教育活動の理解や効果的な接続についての相互の教員が理解を深めることも意識して行った。

まず、11月に3園の児童が来校し、1年生と一緒に遊ぶ交流会を行った。更に、1月の入学明会では、1年生が読み聞かせをしたり、校内を案内したりして園児をもてなした。

どちらの交流においても、幼稚園教員と小学校教員の真ん中に園児児童を置くことで、具体的に教育実践を語る機会となった。



◆3園幼児と1年生の交流会

### (4) その他の教員研修

袋井西幼稚園、田原幼稚園とは別の機会の交流研修も行っている。

中核教員研修として本校と袋井西幼稚園のミドルリーダーが互いに園、校を訪問し、1日研修することで異校種の運営を学んだ。小学校教員は幼稚園の研修会に参加し幼稚園教諭は小学校1年生の学年会に参加した。

また、本校新採2年目の教員2名が、異校種交流研修として袋井西幼稚園、田原幼稚園で1日体験研修を行った。ここ数年、本校には新規採用教員が2名ずつ配属されているが、初任の年は中学年、2年目は低学年を担当することが多くなっている。2年目教員が、実際の保育活動において幼稚園教員が園児のどこを見て、何を考えて準備しているのかを知ることは意義が大きい。幼児教育の実態や幼稚園教員の見方・考え方を生かして小学校での教育活動をより充実させようと考えようになった。

## 3. 協働的な学びへの模索 円形ホワイトボード「えんたくん」の活用

令和2年度の学校教育は、感染症予防の対応に追われた1年間であった。教科指導では、三密を避ける条件により、学習活動は大きな制約を受けることになった。児童の「学校は楽しい」という思いに応えつつ学びを保障するため、教員はiPadの活用や様々な学習活動の工夫を重ねたが、どうしても個人の学びと一斉指導場面が多くなった。「主体的・対話的で深い学び」の実現のため協働的な学習活動をどのように行えば良いか校内で協議を重ねた。

そこで注目したのは、直径1メートルの円形ホワイトボード「えんたくん」である。もともとは、グループディスカッション

ンを活発化させるために段ボールで作られたツールであるが、本校はホワイトボードで特注した。4人一組で使えば、話し合い活動でもある程度の距離が保てるということも導入の決め手となった。

これまでもホワイトボードを使ったグループでの話し合い活動は行われていたが、多くの場合、誰か一人が書記となり話し合いの内容をまとめて書くことが多い。「えんたくん」を使えば、4人が同時に書きながら話し合いができる。より主体的な話し合いができるのではと考えた。また、視覚化しながら話し合うため、慣れてくれば構造的に線で結んだりすることも期待できるのである。

### (1) 教育課程編成会議での活用

まずは、教員が「えんたくん」を使ってみることにした。12月の次年度教育課程の検討に入るとき、「学校の安定を持続可能なものにするために」というテーマで8つのグループに別れ、ディスカッションを行った。

その際、分掌や学年でのグループ分けを止め、年代ごとのグループで協議することにした。当然だが、年代によってその視点や方法論は全く違うものであった。話し合いの後でワールドカフェ方式で交流を図ったが、特に若い世代が新しい視点で学校運営を考えていたところは、ベテラン教員を驚かせた。

### (2) 教科研修会での活用

本校を会場に隣の教員に参加を呼び掛けた国語科研修において、知的構成型ジグソー法を用いた国語科の模擬授業を行った。その中で、生徒に扮した教員は、課題解決のために「えんたくん」を使った話し

合い活動を計画した。

授業での学習課題の解決というゴールが明確だったこともあり、「えんたくん」を中心ににおいて全員の参加意識も高い活発な話し合いができた。



◆国語科研修の様子

### (3) 学習場面での活用

5、6年生であるならばホワイトボードを活用した話し合いは可能と考えられたが、中学年ではどこまでできるか4年生の道徳で試みた。4年生児童はまず、初めて見る「えんたくん」に大変な興味を示した。次にそれを囲んで4人が同時に書き込んでいけることにも興味を覚え、積極的な話し合い活動ができた。

授業者の感想としては、いつも以上に児童が話し合い活動を楽しんでいて、普段は消極的で話し合いに参加できない事が多い児童も、今回は「えんたくん」に自分の意見を書き込み、発言をしている姿が見られたとのことだった。

また、このような協働的な言語活動を可能にするには、低学年で学びの土台が築けていないと難しいということも改めて確認できた。



◆「えんたくん」を使う児童

### Ⅲ 成果

#### 1. MIM デジタルの効果

MIM デジタルは、一人一台端末環境が整ったとたんに大きな力を発揮した。特に児童の学ぶ意欲に対する効果は絶大であった。

運動場が使えない昼休み等、自由に端末を使用して良いこととしたが、1年生の三分の一ほどの児童は、喜々としてMIM デジタルのトレーニングに取り組んだ。MIM デジタルには、視覚化、動作化、音声化などのヒントが用意されているため、児童は友達と楽しみながらトレーニングに励んだ。

MIM デジタルは、トレーニングメニューでクリアする度に島の地図に印がされ、児童の達成感が得られる仕組みになっている。今後、家庭への持ち帰りが可能となれば、1年生の段階で2nd、3rdの子供の状況は大きく改善されるだろう。

また、アセスメントを定期的に行っていけば、児童一人一人の学習状況の改善もグラフで明確になる。保護者に示しながら児童の頑張りを一緒に確認できるだろう。

#### 2. 1年生 意識調査結果

袋井あやぐも学園小中学校では、5年前から魅力ある学校づくりとして、児童生徒の意識調査を継続して行っている。「1 と思う」「2 ややと思う」「3 あまりそう思わない」「4 思わない」の4段階で質問し、「1 と思う」の数値にこだわってPDCA サイクルの実践を行ってきた。

下の表は、「学校が楽しい」「授業がよく分かる」それぞれの質問に対して「1 と思う」と答えた児童の割合である。

令和3年2月調査結果

年度	学校が楽しい	授業がよく分かる
R2	90.1%	85.2%

過去、同時期の1年生の調査結果

R1	72.3%	74.6%
H30	54.5%	28.6%
H29	85.1%	59.5%

コロナ禍において、臨時休業期間や感染予防の制約があったにもかかわらず、この意識調査結果に見られる改善は、MIM デジタルの導入や幼稚園との連携強化が要因となった可能性は高い。しかし、それ以上に、1年部職員が、学年部で日常的に話し合いを行ってきたことが重要であったとの分析をしている。他の学年も同様に学年でのコミュニケーションに努力してきたが、MIM デジタルによるアセスメント情報や幼稚園との頻繁な話し合い等で得た情報をもとに児童理解や保護者支援のために常に話し合っていた。学年によるカリキュラムマネジメントが日常化され、日々の教育活動が調整されていた結果だと認識している。

また、「えんたくん」を使った協働的な学習も低学年での学びの土台ができていれ

ば、中学年でも十分取り組めるという手応えも持てたことは成果である。

## IV 課題と今後の取組み

### 1. MIM デジタルを活用した個別支援体制の確立

授業中での個別支援では対応が不十分となる3rdの児童に対しては、授業以外の場面での個別の早期支援が必要であるが、今年度は3rdの児童に対する組織的な支援までではできなかった。授業以外のどの場面でも、誰が、いつ支援するのか、一人一台端末環境を活用した組織的な支援体制を確立したい。

MIMを低学年だけのものとせず、特別支援教育の中に位置付け、学校全体で組織的にMIMを取り入れていくことが重要である。

### 2. 小学校教員の幼児教育研修の推進

1年部教員と幼稚園教員との接続強化はできたが、全ての小学校教員が幼児教育を理解できているかという課題は大きい。学校の持続可能な安定を図るためには、全職員による幼児教育の研修が不可欠である。来年度は、袋井あやぐも学園として全小中学校が幼児教育理解のための研修会をもつことになった。また、本校では、全ての教員が1年間に1度以上、近隣の3園を訪問・参観することとした。

今後は、近隣3園以外の保育園とも情報交換を行っていくシステムを構築したい。

## [おわりに]

誰一人取り残すことなく全ての子供が自立力と社会力をもった15才に向かって成長していくことを幼稚園、小学校、中学校は保証しようとしたとき、義務教育初期段階で全ての子供に学びの土台を築させることは、避けて通れない。逆に、ここができれば、小学校6年間の学び及び中学校への接続での諸問題が改善に向かう可能性が高いという希望から出発した研究である。

しかし、MIMデジタルも幼小接続強化も導入すれば改善できる魔法のアイテムではない。その取組みをもとに、目の前の子どもたちをどう指導していくか、学年団が熱意を持って日常的に話し合い、学習活動の修正・調整を重ねてきた事が大きい。

幼小中一貫教育の中で、教員が入れ替わっても持続可能なシステムを今後も皆の理解と努力で築いていきたい。

(校長：柴田禎弘)